村野次郎創刊

香蘭

2025年（令和７年）１月号

第 102 巻　　第 1 号　　通巻 1129 号

二〇二五年（令和七年）一月一日発行（毎月一回一日発行）　香蘭　第一〇二巻第一号

香　　蘭

2025年（令和７年）１月号
第102巻　第１号　通巻1129号

目　　次

村野次郎作品　私の愛誦歌（113）……中村美幸…表二
招待作品（奇数月連載）⑧　ネットの海で……加藤英彦…2
作　品
一……4
二……26
三……35
推薦香蘭集……40
香　蘭　集……41
社告　昇格者発表、香蘭基金御礼……15
作品一　十首選（十一月号）渡辺礼比子選……16
作品二・三　十首選（十一月号）千々和久幸選……18
村野次郎への旅（177）昭和期の「香蘭」（十二）……千々和久幸……20
転載『村野次郎全歌集』紹介、評　外塚　喬…22、藤原龍一郎…23、寺島　博子……24
続・酔風船（13）異説・竹取物語……千々和久幸……32
一頁公論（44）我が町の歌人―「島の歌碑守」三浦敏夫……平川良枝……33
エッセイ・自由研究　秋の七草に想いを馳せて……大里友江……45
「小倉百人一首」丸暗記への挑戦（その二）……近藤　純……47
受贈歌集・歌書御礼……50
七　首　抄（十一月号）……谷本・能城・関口（洋）・市川……51
焦　点（十一月号）片仮名のある歌……松沢みどり……52
作　品　評（十一月号）
作品一……鈴木桂子……54
作品二……小笹岐美子……56
作品三……中井房江……58
香蘭集……満木好美……60
緑　地　帯……小林（ま）・水上・市川……63
明宝研究会第一五七回　十月例会　万葉集に見る常世……高畠　崇……66
他誌に掲載された香蘭会員の作品と動向……72
歌会及び会合・会員消息・他……78
令和七年度香蘭賞　作品募集……85
編集後記・新宿日記……86
表紙絵……山口　蓬春「桔梗」
目次・緑地帯カット……和田和雄……表三

村野次郎作品　私の愛誦歌（113）

昨夜（よべ）一夜凝りて作りしわが歌を
朝明（あさけ）に見ればはかなかりけり

『樗風集』

中村美幸

この歌は一九三五（昭和十）年、先生四一歳の作品で、先生の歌には珍しく、清々しい叙景歌では無い。しかも、一夜を掛けて凝りに凝った力作と思っていた歌が、朝になってみて見たら大したことは無くて虚しくなった、と言う作歌に対する何とも言えぬ哀感が漂っている歌である。

何故この歌が愛誦歌になったのか。私は十代の終わり頃に香蘭短歌会に入会し、その年頃の御多分に漏れず、相聞歌を多く作った。歌会に出席し始めた頃に出した相聞歌に「この歌は夜中に作った歌だな、凝ったつもりがムードばかりの歌になっている」という批評と共に先生のこの歌を紹介された。特に相聞歌は夜に作ると甘々になるとも教わった。

先生が陥った罠は、相聞歌ではないと思うが、私にとってこの歌は、愛誦歌であると同時に戒めの歌となっているのである。

（『村野次郎全歌集』18頁、『樗風集』）

加藤　英彦

ネットの海で

国家は道徳的規範たり得るか。
一国を束ねるちから鬩ぎ合う遠近（おちこち）に水勢がしぶきをあげつ
芽ぶきだす街路のみどり党派的言論はかく喧しくて
こんなはずではなかったとポケベルが爆（は）ぜる雑沓のなかの花篭
いっせいに照準しぼる銃口のまえに熄（や）みたり非戦論など
煽ることを愉しむように一台が寄せくる外環道二十五時
だれが火を放ちしかあゝいちめんに夜が明るむネットの海で
現れよ、いまひとりの筑波杏明――
押しだまり監視する目の隊列にすこし俯くひとりはなきか
柑橘をしぼる指さきから匂う語り継がねばならぬ声々
まだ声をしぼれるうちは揉まれても蹂（ふ）まれても歌えうたえ、沖縄（ウチナー）
あれはわたしたちの立て看九十五歳の文子おばあの太き筆さき

◇ 招待作品 ◇　奇数月連載⑧

もう名前も覚えていないが、すこし小柄で癖毛の生徒だった。昼休みになると彼はだれもいない音楽室でひとりピアノを弾きはじめるのだ。ジャズだった。指先の軽快なリズムと諧調を全身でとても愉しそうに弾く。音楽の身体化とでも呼びたくなるような至福のひとときだったろう。牧師の息子だったから、教会ではミサ曲なども弾いていたかも知れない。あの高校時代の昼休みはそんな彼だけに許された特別な時間だった。自らのピアノのことなどひと言も語らなかったが、わたしは幾度か音楽室のドア越しに彼のピアノを聴いたことがある。

子どもの頃にわたしもピアノを習いに行かされた。あれは昭和三十年代の大衆的な流行だったのだろう。熊本の社宅にあったオルガンは、福岡に引っ越したときピアノに変わった。小学校にあがったわたしは姉とふたりで近くのピアノ教室に通い始めたのだ。ひと月ほども経ったろうか。若いピアノ教師が丁寧に拙宅まで訪ねて来てくれた。「坊ちゃんには月謝がもったいないかと……」破門である。この子には向かなかったようだねと母は笑って父に報告した。教師の熱意を冗談で混ぜっ返してろくに練習もして来ない一年生だったからおよそ可愛くなかったろう。

それからピアノ教室は習字塾に変わった。墨を磨ることが面倒なわたしはどれだけ磨ればよいかが分からず、幸い硯は黒かったのでもう十分と硯のほうが優しく語りかけてくれた。半紙に筆を下ろすとまるで薄墨が滲みだすように文字はかなしく膨らんだ。わたしの半紙に朱の丸印がついた記憶はあまりない。破門にこそならなかったけれど、そこもやがて辞めてしまった。根気がないというか面白いとは思わなかったので、今思えば悉く親の期待の実らない子どもだった。

福岡の社宅は五分も歩けば海だったので、専らわたしは友だちと海辺の岩場で日が暮れるまで遊んだ。新聞販売店の息子松永と漁師の息子の鬼木、そして会社役員の息子田崎が仲間だった。戦争ごっこばかりしていたけれど、その海は遊泳禁止でわたしは今でも泳げない。できないことだらけの子どもだった。

高校時代のあの牧師の息子はどうしているだろう。どこかでまだジャズを弾いているだろうか。いつも笑顔を絶やさないヤツだったがふと懐かしく思いだす。

四選者の作品

妻三回忌　　平塚　千々和　久幸

廃線の跡地に咲ける月見草が昔のことは忘れよという
「ヒバクシャ」とう人類が身近に居ることを教えてくれぬノーベル賞は
連絡の三日絶えしがきみの住む錦町にも時雨の降るか
一年に一度か二度のネクタイを締め創業記念式典に行く
いますぐに死ぬ気あらねどコオロギが墓買わぬかと草むらで鳴く
この次はおまえの番だと仰向けに死にたる蟬がうす笑いせり
死ぬために墓を買いしがそれよりは墓に急かさるる日々となりたる
そこここに曼珠沙華咲き残暑なお暑き日妻の三回忌くる

机　　横浜　渡辺　礼比子

ぽつねんと切株の上に猿の子が座りていたる山里の秋
所在なき一日の暮れて夜を忙し時間はのびたり縮んだりして
みずからの立ち位置読めず静観す日和見主義のつもりなけれど
いつになく夫がケーキを買いきたり同窓会に出たるこの夜
親戚の誰かが実家に置き行きしアンティークデスクの栗色を愛ず
学習用机小さくなりし時わがものにせしアンティークデスク
嫁入りに書棚は持てど机は持たず狭き社宅に置き場などなく
ハンズにてパーツ買い来て簡素なる机を作りくれたり夫が

はばかる言葉　　鎌倉　高畠　憲子

ふる里に向かふ列車に今日は見ず酷暑の残る秋の筑波嶺
半年ぶりに会ひたる老父この度は杖を離さず室内歩く
半年を会はざる父は弟を「オヤジ」その妻を「オカーサン」と呼ぶ
お義姉さんの名前で呼ばれましたと言ふ長年父に尽くしし義妹が
服薬の数を間違ふやうになり孫がケアする九十二歳
この夏は粥にて食をつなぎたる老父は息子の嫁に頭を下ぐ
転倒の痕が老父の禿頭にいく筋も這ふ　ゴルバチョフだな
ご尊父は私より若いと言ふ人に「老い父が」とは憚る言葉

衝動買い　　我孫子　丸山　三枝子

群がりてくろぐろとゆく夕烏　白き烏の一羽が混じる
書きかけの葉書まどべに置いたまま何処か遠くを彷徨っていた
枯れながら立つ向日葵を駅までの往還に見る　今日も立ってる
そよぎ立つエノコログサよエノコロを猫の土産にする歌のあり
衝動買いの黒のブラウスぶら下げて月夜の小石けりつつ帰る
雨の日の香取神社の末にきて黙って濡れている尉鶲
暮れてゆく冬空さしてつくづくと夕映えているメタセコイアは
期日前投票に来ててていねいな対応さるる犬友きみに

作品一　十首選

（十一月号作品から）　　渡辺　礼比子　選

・妻よりは遅れ死を待つわが頭上蟬はいつまでも鳴き止まぬなり
千々和久幸

妻に先立たれ、鰥暮しに甘んじている作者。自らの死期を考える年齢になったが、なかなか周囲が彼を自由にしてくれない。頭の上で鳴き止まぬ蟬とは、依頼原稿を待ち構えている出版社、懇切に教えても教えても進歩の跡の見られない不出来な弟子たち（筆者もその一人ではあるが）また次から次へと持ち込まれる組織内の各種懸案事項etc.と読んだ。しかし、見方を変えれば、こうした浮世のしがらみこそが、作者を現世に引きとめていると考えるのは虫が良すぎるだろうか。

・ふるさとの同じ道にて迷う夢ながく見ないが道もあらなくに
丸山三枝子

この上句で詠まれているような夢を見ることがある。これは一種の帰巣性の顕われであろうか。そんな夢を「ながく見ない」というのは故郷を発って以来、長い年月が経過したということなのだろう。

しかしこの歌の核となっているのは何といっても結句の「道もあらなくに」である。「あらなくに」は万葉集にも出てくるフレーズで、「あるわけではないのに」の意味である。この歌には、作者の故郷能登が、元旦の大地震に次ぐ夏の水害によって、壊滅的な被害を被ったという背景がある。ふるさとの村へ帰ろうにも、道さえなくなってしまったという、悲痛な嘆きの籠る一首である。

・健（したた）かに伸びたる蔦に円やかな西瓜は御座る日照りの畑
青山　侑市

酷暑の夏であったが、作者の畑の西瓜はまんまるく見事に成長した。「健」という字に「したたか」と振り仮名をふったのはそれだけの思い入れがあってのことだろう。

さて、この歌の中では何といっても「居る」の尊敬語「御座る」が歌のアクセントとして抜群の効果を発揮している。こう書かずにはおられない程、この西瓜は立派であり、作者ご自慢の出来であったに違いない。

・窓少しずらし見ており救急車に運ばれゆきし隣家の主人（あるじ）
飯島智恵子

昔の村落共同体ならいざ知らず、昨今の都会生活においては、他者の生活にむやみに立ち入らないのがマナーになっているようだ。

しかしこの作者は隣家の事件に全く無関心というわけではない。日頃親しく行き来している関係ででもなければ、多くの人がこの作者のような態度をとるのではないだろうか。「窓少しずらし見ており」にいうにいわれぬ臨場感がある。まさに手練れの作である。

・少しずつのはずの野菜が大鍋に煮られてどうするこの筑前煮
伊藤美恵子

たびたびおなじ経験をしているので読み過ごせない一首であった。いつも筑前煮は大量に出来てしまうので、今度こそ少しずつと思う

が根菜類は煮ても量が減らないため、いつも結果は同じことになる。一連の歌の内容からすると、作者はこの鍋の中味を一人で平らげねばならない。一首の裏側には孤独感もあるだろうと想像されるが、「煮られてどうする」という軽妙な表現を四句に持ってきたことで、読者に負担をかけない、おとぼけの味わいのある厨歌となった。

・リハビリに日毎通ひし道の辺に日々あたらしき木槿咲きつぐ

岡野　甫江

九月号作品に「久々の猪の出現に驚きて尻餅をつき手首痛めつ」がある。その時の怪我から回復するまでの日々に詠まれた歌であろう。毎日リハビリに通ったとしたら、決して軽い怪我ではなかったはずである。そんな不自由な暮らしのなかで、次々に新たな花を開く木槿を眺めながら、時の移ろいに思いを致すのは、何よりの慰めであったに違いない。

・熱くしてしまいし地球に水をやり涼を求めん朝顔植える

斎藤　俊子

地球温暖化をおし進め、こんな酷暑の夏にしてしまったのは、我々人間の責任である。だからせめて身近にできるささやかな行為で地球の熱を冷まそうではないかと作者は考えたのであろう。それは例えば庭に朝顔を植えて朝夕水をやること。科学的とはいえないかも知れないが、こうして、人も地球も少しでも涼をとることができればという、作者の涙ぐましい心意気の窺える歌。

・世の中の流れのままに存へて今は流行（はやり）の老々介護

土井紘二郎

今日まで体制に抗うこともなく、ただただ慎ましやかに暮らして来た。そしてこの先も、このまま何事もなく、人生のゴールを迎えられるものと信じて生きてきた。しかし、あろうことか、晩年になってみると目の前に「老」が大きく立ちはだかり、いつしか妻を介護する身となっている。周囲にもそういう人はいくらでもいるし、全く想像しなかったわけではないが、いざわが身にふりかかってくると、現実を受け止めることは容易ではない。「今は流行（はやり）の」という句に作者の精一杯の強がりが見え、諧謔味のある歌となった。繰り返される「ラ行音」によって、リズムよく詠まれている一首。

・仏壇の花を頼みしヘルパーに「壇」の字聞かれ書けてほつとす

西野美智代

年を重ねると、これまで難なく書けていた漢字がふとした拍子に出てこないという経験が誰にでもあるのではないか。しかし、作者の場合、それも一瞬のことであった。いざペンを持てば、スラスラ書けたことで大いに安堵しているところ。これで自身の面目は保たれた。「仏壇の花」「ヘルパー」などの語の効果によって、ドラマの一場面を見るような、印象的な歌となった。

・わたくしが居なくなること前提に物事進む定年間近

宮口　弘美

作者は長い間自分なりに誠実に、組織の中で働いてきた。だが、定年退職が目の前に見えてくると、代わりはいくらでもいるというかの如く、みるみる新しい体制が出来上がっていく。それを横目で見ながら、一抹の寂しさが涌いてくるのはどうしようもない。自分は去っていくのだからこうなるのは当然と思っていながら、揺れ動く心情を一首にぶつけた。

作品二、三　十首選

（十一月号作品から）

千々和　久幸　選

〈作品二〉

・少しだけ昨日のわれが残されて今日のわたしのうすき憂鬱

安田　恵子

昨日のわれを今日に引きずる微妙な感情を掬い上げて、今日のわたしを凝視した心理詠。昨日から今日へ迂回し屈折して今日のわたしの憂鬱がある、という。やや古風な感じのする歌だが、昨日のわれは今日のわたしではないことは紛れもない。さりながら昨日のわれがなければ今日のわたしもない。作者は今日のわたしの在りかを懸命に問い続けているのだ。ここが全ての基点だと―。

現在の作者はかつて近代短歌が切り開いた詩の地平を辿ることによって、新たな境地を目指そうとしている。期して待つべし。

・大磯の浜辺の小石を拾いゆく波に耐えたる確かな丸み

小原　裕光

安田作品が発展途上の歌ならば、小原作品はその一つ先の世界をマイペースで手繰り寄せた歌。大磯行とタイトルされた一連のうちの一首だが、行きずりに拾った小石に境涯が透けて見える。作者には写実の歌であり、もとより境涯詠の自覚はない。どこかに自愛の思いも窺える。

事実に即して素直に歌い、心温まる作品。境涯詠は詠むものではなく、詠まれた結果滲み出てくるものである。

・この暑さどうにでもなれと寝る前にアイスクリーム二つ食べたり

関　哲行

・どうにでもなれとは言ひたくないけれどこの酷暑の日地震きたならば

能城　春美

関作品、能城作品を並べたのは、去年に引き続く「危険な暑さ」への恨み言がいっそ痛快だったから。二首とも「どうにでもなれ」と取り付く島もなく吐き捨てて、酷暑への恨みを果たそうする。

関さんよ、大分のアイスクリームを二つ食べたくらいでは、この酷暑はどうにもなりますまい。頭から氷水でも引っ被らねばねえ。

春美さんよ、「言ひたくない」ことを言う快感は、暑さを忘れさせてくれましたか？いやさ、「言ひたくない」けど「言いたいこと」はあなたならもっとあったんじゃない、そのことで心身が火照ってんじゃない！でもさあ、泣き面に蜂の地震まで呼び出すとはねえ。

・台風に皇帝ダリア跪く支えてやらな咲くまで三月

三澤　幸子

関・能城台風の後にこの歌に出会うとなぜかほっとする。作者の心やさしさに台風一過の風情が感じ取れるからである。前の二首と違い、この歌は思いの丈を外に吐き出すのではなく、他者の傷みを懐に抱え込んで癒やそうとする。台風に跪くまでに薙ぎ倒された皇帝ダリアなら、二月でも三月でも支えが必要だろう。

いつの世も泣く子と皇帝には勝てぬ、というのでもあるまいが。

〈作品三〉

・ドラえもんのシール貼られた扇風機畳の部屋に昭和がのこる

有馬智賀子

眼目は結句。これまでも昭和を哀惜した多くの歌に出会ったが、こう詠まれると昭和を知っている人は胸にじんとくる。「ドラえもん」も昭和を彩った一人（？）だが、有馬家は「ドラえもん」と共にあったのだろう。

広辞苑にも収録されている（連載開始は１９６９年）くらいだから、人気のキャラクターだったのだろう。「だろう」と書かざるを得ないのは、評者にはさして興味がなかったからだ。

・今日われは見知らぬ街に来たはずがサイゼリアありドトールもある

川久保百子

平明に歌われて共感する読者も多いだろうし、思い当たる向きもあろう。せっかくエトランゼ気分になったのに、これではいずこも同じ秋の夕暮れではないか、と作者はいささか興ざめの体である。

無理もない。多様化社会などと言いながら、都市の有り様は大資本のコスト第一主義でチェーン化され、歓楽街もワンパターン。今や「知らない街」は流行歌の中にしかない。

サイゼリアもドトールもおおかたは暇潰しの場所だから、コーヒーの味を吟味することはない。

・夏の陽に若き命の輝やいて永遠に生きる気がした昔

小城　勝相

過去回想の歌は説明だから採らぬ、という先達歌人がいた。その通りだが、回想詠は往々にして甘美なモノローグで終わる。問題はその回想が過去を浮いたり沈んだりして、どれほどの現在や未来を引き連れてくるかにかかっている。

この歌、下句が回想詠の枠を越えて作者の「青春論」になっているところがいい。「青春時代が夢なんて／あとからほのぼの思うもの」（昭51年、阿久悠詩、森田公一曲）ではないが、作者に自愛の感情や、回想の世界からの自己救出はあっても、手放しの耽溺はない。だから自己陶酔と言うより自己救出と言った方がよりはっきりしよう。

・炎天の日差しかげりて夕暮の水打つ音に夏は過ぎゆく

近藤　純

眼目は下句の感情移入を含む描写にある。言い換えれば、主観に支えられた事実描写にある。なんでもないようだが、この小さな発見が一首に彩りを与え、抒情気分を盛り上げている。

客観描写と雖もどこかに主観の翳が差していなければ、短歌としての抒情味は薄れる。この歌、上、下句のバランスがうまく配分されて姿の良い歌になった。

・白壁を蜻蛉の影のよぎる午後酒蔵つづく路地を抜けたり

澤田久美子

白壁、蜻蛉の影、酒蔵、路地とこれだけ歌材が揃えばもう満腹しそうだが、むしろ涼しげな印象を与える。次から次と言葉が繰り出されてくるが、煩わしさはない。

それは言葉と言葉の間を適度に風が抜けていくからである。言葉を詰め込んだだけのフロック（まぐれ当たり）ではない。

飲兵衛は「酒蔵つづく路地」と言われただけで、もうほろ酔い気分にさせられるのだから。

村野次郎への旅（177）

昭和期の「香蘭」（十二）

千々和　久幸

今月から「香蘭」第五巻第七號、昭和二年（1927年）七月一日發行の本誌を読んで行くことにする。例によって目次から見て行こう。表紙畫裏畫及題字は北原白秋、編輯兼發行者田中次郎に異動はない。

巻頭の短歌欄の出詠者十二名は左の通りであった。

村野次郎、筏井嘉一、橋本敏夫、本間樂寛、冬野木枯、南部松若丸、川村浩、芥子澤新之介、石野正太郎、今井嘉雄、酒井廣治、杉浦翠子、次いで杉浦翠子のエッセイ「天才気分」が四頁、第二短歌欄に眞島勝郎、成田憲三、西村孝、住吉良康、日根まもる、若林昇、神谷葛三、庚申薫の八名。前月歌壇合評は矢代東村、筏井嘉一、杉浦翠子、村野次郎。文月集に今福公一、大貫迪子など十五名、香蘭合評會は次郎・嘉雄・樂寛・政一、そして南部松若丸のエッセイ玄玄録が四頁、七夕集（杉浦翠子選）に二十二名、潮光集（酒井廣治選）に二十四名、廣野集（村野次郎選）に三十一名、東道集、歌會記事、編輯後記と続き全六十四頁はこれまでで最も頁数が多い。香蘭が益々隆盛になってきていることが解る。

さて巻頭の村野先生は九首の出詠で、例月より三首ほど多く詠まれている。

印旛沼　　村野　次郎

六月、森田畫伯、宇都野國士、本間君と共に吉植氏宅に遊ぶ

①野づかさにのぼりて見れば葦の間ににぶく光りて暮れゆく沼の面

②都住みに倦みて暮せば若葦を渡る風すらにくからなくに

③都住みのわれにわからぬ鳥多し聲ことなりてしきりに鳴くも

④業に倦み遊びて居ればそばに來て鳴く行、子もあざけるごとし

⑤氣をかへて聞けば行、子獨り身のわれをあはれみ鳴けるがごとし

⑥屁をひりつつ畦ゆく友や世の中のよしなしごとは思はざるらし

⑦あゆむさまおぼつかなくも朝風に走りて遊ぶ鶏のひよこら

⑧早苗田にかけし田水は曇り日の光たたへて満ちあふれたり

⑨畦越えてあふれし水はしげりたる杉菜ゆるがし消えゆくらしも

一連の作品は、かねてより親交のあった吉植庄亮氏（1884～1960）に招かれた折のもの。その経緯については六月号の編輯後記を引いておいたのだが、重複を承知でそのサワリの部分を再録しておこう。

…印旛沼へは森田恒友畫伯が一所においで下さって幸であつた、畫伯と吉植氏と本間君と私の四人であの古のままのやうな葦沼を小舟で漕ぎまはつてゐると、都で離覬動いてゐる私の頭の具合も一日で大分變つて來るようである。後から宇都野研氏が見えたので、所謂ご自慢のトラクターや用水の發動機を見た。

兎に角エライ事をやつてゐて愉快である。

さてざっと作品を見ておこう。

昭和二年と言えば先生は血気盛んにして好奇心旺盛な三十三歳、郷里の北多摩郡多磨村とは同じ田園地帯とは言え、ここはひと味ちがった印旛沼、久々に浩然の気を養うには恰好の機会であったに違いない。

①の歌、客観的に見れば取り立てて言うほどの事はない光景なのだが、都を離れて見れば「野づかさ」「葦の間」「沼の面」といった景物はそれだけで歌ごころを誘ったに違いない。そんな心躍りが感じ取れる歌。

②③④の歌、葦の上を渡って来る風も都とは違った匂いを持ち、鳥の鳴き声もいつもは聞くことのない声で鳴いている。先生は旅人か異邦人になった思いで印旛沼の風に立っている。今は気苦労の多い「都住み」に倦み、忙しない「業」に縛られた身を解き放つて異郷の自然に抱かれている、というのである。

⑤そしてここ印旛沼の風光の中にあって、始めて自分が獨り身であったことを、そして繁忙な都の明け暮れにはさほど感じなかった獨り身の悲哀を、再認識させられたのだ。「行ゝ子」の鳴き声をなぜかをそう聞いてしまったのだ。

⑥の歌、「屁をひりつつ畦ゆく」のは吉植氏、と先生は言わない。この放胆にしていかにも野趣深い動作に先生は、いっそ「天晴れな快男児よ！」と感動すら覚えたのではあるまいか。ここ印旛沼では「よしなしごと」もまたありふれた浮世の人間の営みには違いないのである。都会人なら何とか言うところだろうが、風と共に消えてお終いなのだ。

⑦⑧⑨の歌、こんなごくありふれた光景も印旛沼の風光の中で見ると、新鮮な光景に見えるから不思議だ。久々の解放感が旅人である先生の眼を慈しんでいるかのようだ。

先生の歌とは関係がないが、わたしはとっさに若山牧水の次の歌を思い出していた。

・旅ゆけば瞳瘦するかゆきずりの女(をなご)みながら美(よ)からぬはなし『海の聲』

余談はさておき前月歌壇合評を読もう。評者は前述の矢代東村、筏井嘉一、杉浦翠子、村野次郎である。

國民文學　松村　英一

ひろ桶によこたへられし鯉の眼のすゞしきかなや光うるほふ

眞鯉はも何におどろく尾をはねてつめたき水をはじき飛ばせり

（東村）特にひろ桶などといふ必要があるのか。又第二句と第三句の續きで鯉の眼がよこたへられた様に響いて、一寸氣になる。この歌は四五句が大切な役をしてゐるわけだが、「涼しきかなや」「光うるほふ」とこう二つ折かへして、重ねられると感じが素直に來ない、うるさくて、少し強いられる氣がする。二首目のはどつか面白い所がある。妙に凝つた所のないのがいいのかも知れない。つめたき水をはじき飛ばせりの所が氣に入つた。一首として難くせをつければいくらもつくが。

（嘉一）何か言ってみたいようで、さて何かを言ふていいのか自分でわからなくなります。誰かが一寸口をきってくれれば尻馬に乗って何か言へるかもしれませんが……。

我々かけ出しものに、物も言はせぬだけ、歌が、ふまへる所をふまえて、些かの破綻とも見つけさせないのかと思ひます。作者の腕にさすがはと、うなづけるのであります。

（以下次号）

続・酔風船（13）

千々和　久幸

異説・竹取物語

いまは昔、竹取の翁といふもの有けり。野山にまじりて竹を取りつゝ、よろづの事に使ひけり。名をば、さかきの造となむいひける。その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。

『竹取物語』（阪倉篤義校訂、岩波文庫）

お馴染みのかぐや姫の物語だから、改めて説明の必要はなかろう。たださほどに人口に膾炙した物語でありながら、「平安初期にできた最古の作り物語」というだけで、作者も成立年代もはっきりしない。だが本エッセイの関心はそんな所にはない。

結論を先に言ってしまえば、この物語は嫁に出す娘を持った親―なかんずく父親を寝付かせるための物語、だというにある。この場合、「寝付かせる」とは「しぶしぶ諦めさせる」というほどの意味である。わたしは自分の娘が四、五歳になったある日、卒然とそう悟ったのだった。そしてこれはわたしのちょとした発見（一）だと吹聴したくなった。ただ、この物語は学校では習った記憶はなく子供の頃、絵本かなんかで読んだきりになっていた。

そこでこの発見を十月会会報のらんだむ300字に書き残しておいたのだが、まったく無視された。とは言えこの発見はわたしが知らないだけで、存外世間には流布していたのかも知れない。

さて前述の文庫では、成人したかぐや姫に求婚する五人の貴公子への献上物が次のように記述されている。

かぐや姫（翁）の要求は石つくりの皇子には「佛の御石の鉢」を、くらもちの皇子には「東の海の蓬莱山にある銀の根、金の莖、白き玉を實とする木の一枝」を、今ひとりには「唐土にある火鼠のかはぎぬ」を、大伴の大納言には「龍の頸にある五色の玉」を、いそのかみ中納言には「燕の持つ子安のかいひとつ」をそれぞれ献上せよという。求婚を拒絶するための難問である。

念のため物語のエピローグを前述の同書から抜き出しておこう。

竹取心惑ひて泣き伏せる所に寄りて、かぐや姫言ふ、「こゝにも心にもあらでかく罷るに、昇らんをだに見をくり給へ」と言へども、「なにしに、悲しきに見おくりたてまつらん。我をいかにせよとて、捨て、昇り給ふぞ。具し出（で）おはせね」と泣き伏せれば、心惑ひぬ。「文を書きをきてまからん。戀しからむおりおり、とり出（で）て見給へ」とて、うち泣きて書く言葉は、「此國に生まれぬるとならば、歎かせたてまつらぬほどまで、侍らで過ぎ別（れ）ぬる事、返々本意なくばこそおぼえ侍れ。脱ぎをく衣を形見と見給へ。月の出だたらむ夜は、見おこせ給へ。見捨てたてまつりてまかる、空よりも落ちぬべき心地する」と書きおく。

まこと残酷な物語である。「父は永遠に悲壮である」と言ったのは萩原朔太郎だが、父たるもの娘の前で泣きは見せられぬ。

一頁公論（44）

我が町の歌人―「島の歌碑守」三浦敏夫―

平川　良枝

・師は嘗て島守と吾を呼びにけり今日より吾は島の歌碑守　　敏夫

三浦敏夫は、岩城島で十九代まで続いた三浦家の十八代当主であった。

一年ほど前、「岩城島ゆかりの近代短歌を鑑賞する～三浦敏夫や若山牧水、吉井勇を中心に～という「上島文化財講座」が開催された。講座から学んだことや岩城島を訪れたことを私なりに整理してみた。

三浦敏夫の先代は、備後から岩城島に移住したのが始まりで商業や新田開発、塩田経営などで財を成し、岩城村の大庄屋となり広大な屋敷が松山藩の島本陣に定められた。最後は、当時の岩城村に寄贈され、昭和五十六年に解体修理をし、現在は、広大な屋敷の一部が残され「岩城郷土館」として三浦家ゆかりの文化的資料が展示・保存されている。

冒頭に紹介した短歌の中の「師」とは、若山牧水である。

敏夫は、明治二十五年生まれ、短歌を趣味とし、明治大学在学中に早稲田大学生の若山牧水の存在を知ったが、大学を退学し島に帰ったため東京で牧水と会うことはなかった。その後、島の郵便局長として生活し、牧水とは手紙で交流を続け、牧水が創刊した短歌雑誌「創作」の同人として親交を深めた。

牧水は、故郷の宮崎から東京へ行く途中に三浦敏夫の住む岩城島に寄っている。牧水の岩城島訪問は、大正二年（一九一三年、牧水二十九歳）五月十八日。本宅の前の海に突き出た離れ（聴松庵）で、五日間滞在した。

この時、牧水が即興で詠み短冊に揮毫したという短歌二首が複製ではあるが、郷土館に展示されている。

・窓前の瀬戸はいつしか瀬となりぬ白き浪たちほととぎす啼く　　牧水

・ゆたゆたにはやく潮満てゆたゆたに酒さかづきにみちてあるほどに　　牧水

（歌集未収録の作品とのこと。）

牧水は、この滞在中に歌集（第六歌集「みなかみ」）を編集する。家族との葛藤から清書が進まず敏夫が代わって清書をしたと言われている。聴松庵での数日間は敏夫にとって忘れがたい思い出となった。牧水は昭和三年に亡くなるが、昭和五年発行の「芸備日日新聞」に「牧水を億ふ」という記事を載せている。

また、若き牧水と親交を結んだ吉井勇も岩城島に立ち寄り、亡き牧水を偲び聴松庵に一泊している。昭和十一年の事であった。

・牧水がむかしの酒のにほひして岩城の夜は寂しかりけり　　吉井　勇

・ありし日の友のことごと思ふからに岩城の夜は眠りかねつも　　吉井　勇

牧水の死後も親交は続き、牧水の夫人（若山喜志子）も敏夫に招待されて聴松庵に四日間滞在し、牧水を偲んだ。その後敏夫は、夫人の詠んだ歌と牧水の歌を歌碑にし、郷土館の中庭に建立した。歌碑の除幕式を終えた三年後、七十四歳で敏夫は亡くなったという。

・瀬戸の背を詠み給ひしは初夏なりき君若かりき吾若かりき　　敏夫